



Eiche

Die Eiche ティ・アイヘ

Japanisch-Deutsche Gesellschaft in der Präfektur Chiba

事務局 〒274-0822 船橋市飯山満町2-681 ワールドナースィングホーム内

Phone: 047-467-6111 Fax: 047-467-6123

新春講演会「ドイツ統一20周年、政治・経済の動向」全文

(以下は1月30日の新春講演会における、プリンツ公使の講演内容全文です。)

駐日ドイツ連邦共和国公使 Dr. アンナ・プリンツ

1980年代末、欧州ではいくつもの劇的な動きがあった。ライプツィヒではいわゆる月曜デモが開催され、毎週何十万人もの人々が「我々こそ国民だ!」とのスローガンを掲げ政治の現状への抗議の意を表した。ポーランドでは、自主管理労組「連帯」が改革への道を切り開いていた。ハンガリーでも改革が進められた。東独市民が大挙して出国し、オーストリア、ハンガリー等の第三国を経由してドイツ連邦共和国(西独)に向かったことで、東独政権への圧力はさらに高まった。

壁開放の様子は、今日のメディアにおいて象徴的映像として扱われている。1989年11月9日夕、東独のシャボウスキSED政治局員が、ベルリンで行った有名な記者会見で渡航制限の緩和を告げたが、これには誰もが驚いた。その夜から翌日にかけて、大勢の東独市民が国境検問所に押しかけ、28年来初めて、検問を受けずに東西ドイツの国境を通過した。

ベルリン、ドイツ、ヨーロッパ、そして日本を含め世界中の友人たちがドイツ統一を喜び合った。日本からは後に、ベルリンの壁の跡地となった通り沿いに1400本もの桜の木が寄贈された。

転換期以降、再統一されたドイツは数多くの課題に直面することとなり、東部地域の生活状況は激変した。国家の統一で、西側の政治、社会、経済秩序を受け入れた東部地域では、生活状況が一変した。それは、独裁体制から民主主義への移行だけでなく、中央統制型計画経済から社会的市場経済への歩みをすすめることでもあった。ただしそのためにはまず、遅れた東独経済を近代化せねばならず、一から建て直さなければならない場合も多かった。

こうしたとてつもない課題や変化はどうやって克服されたのだろうか。東部の生活状況をできるだけ早く西部に匹敵するものにするために、どのような対策がとられたのだろうか。どのような分野で、今も問題が残っているのだろうか。こうした問いに答えるべく、今挙げた各点をもう少し細かく見ていきたい。

ドイツ再統一に伴い、壁崩壊の数日前に全ての役職からの退陣を余儀なくされたエーリヒ・ホネカーをはじめ、東独の政治指導部と高官がほぼ全員交代した。代わって政権を担ったのは、新たに登場し多くが無名の顔ぶれだった。政治の世界だけでなく、行政、軍、文化の分野でもさまざまな人事の刷新が行われた。こうして、東独で相当の地位を手に入れていた多くの人々が、行き詰まり、新しい国における再スタートを余儀なくされた。一方、新たに得た自由を活かし、かつて東独でさまざまな制約によって阻まれていたことを成し遂げられるようになった人も大勢いた。

こうしたエリート層の交代、模範の喪失、上に立つべき人物の不在により、多くの東独市民は、新しい統一ドイツで方向性を見出せずにいた。これは、政治における過激政党の台頭と政治に対するある種の倦厭感をもたらした。しかし文化の面では、それまで東独ではみられなかったような多様性が生まれた。長年の管理と抑圧から解放され、市民が自由に自分の可能性を追求できるようになったからである。

政治的には、再統一は一党支配から民主主義への移行を意味した。1990年3月18日、東独で初めて最後の自由選挙が実施された。最後の選挙となったのは、すでに同年8月23日、東独地域が10月3日付でドイツ連邦共和国に編入されることが決定され、その後12月2日に統一ドイツ初の選挙が実施されたからである。

この編入で、西独の国家機構が東に受け継がれ、西独法規の適用領域が統一ドイツ全域に拡大された。これにより、西独の憲法である基本法に定められた基本権も東独市民に適用されるようになった。東独市民は、長年にわたる管理と抑圧を経て、ようやく言論の自由を手にするとともに、イデオロギー的な制約に晒されることもなくなったのである。

東独市民が自由を実感する上で特に重要だったのは、新たに手にした渡航の自由だった。分断の時代、旅行の可能性は限られており、西側諸国への旅行などはほぼ不可能だった。したがって(多くの国で国境審査が廃止された)現在のEU地域、あるいはもっと遠方へ旅することは、自由を実感する象徴的な体験となった。東部では、旅行会社が雨後の竹の子のように設立され、市民の旅行熱は今日まで続いている。

東独の計画経済は、すでに転換期の前からさまざまな機能不全を起こしていた。東独計画委員会も1989年、経済はほぼ末期的な状況にあると見ていた。原料や生産財の不足が頻発し、機械の大半は著しく老朽化していた。モノ不足は、日用品等さまざまな消費財についても発生し、これが特に顕著だったのは、柑橘類や最新電化製品など、西側から輸入しなければならないためにほとんど入手不可能な商品であった。こうしたモノ不足は、体制にとどめを刺した原因のひとつでもあった。それは市民が、現状をこれ以上甘受することをよしとしなかったからである。

こうしたことから、東独の生活水準をできるだけ早く西の水準に引き上げるべく、東西通貨の交換比率が1対1に設定された。これは、東独市民の要求でもあった。交換比率が高く設定されたことで、東独の購買力は向上し、その後数年にわたり、冷蔵庫、自動車等高額商品をはじめとする西独製品が、東独地域で爆発的に買い求められた。

しかし、この交換比率が実際の東独マルクの価値を大幅に上回っていたため、東独の賃金コストが跳ね上がり、大半の企業の競争力が著しく削がれることとなった。さらに、購入された品物は大半が西側製品だったため、ドイツ再統一は東独企業に大きな打撃を与えた。

また、再統一は国にも重大な財政的課題を突きつけた。コール政権は当初、再統一に係わる経費は一定の範囲内で捻出できるものと想定していたが、やがて、必要なコストは予想をはるかに上回ることが明らかになった。そこで財源として、所得税に上乘せする形で「連帯付加税」が導入され、また鉱油税が1リットル22ペニヒに引き上げられた。

多くの東独企業は、変革期後、上述のようなドイツマルク導入に伴う賃金コストの上昇、投資の不足、企業の老朽化した技術、労働集約型生産システムが原因となり、深刻な経営難に陥った。

さらに東側ブロック(旧COMECON諸国)の崩壊は、東独経済に大きな問題をもたらした。東独にとり最大の貿易相手と製品の主要な販路が、完全に失われてしまったからである。

こうしてソ連崩壊によって販路が失われたこと、また東独企業の生産性が低く製品の魅力に乏しかったことから、多くの東独企業が倒産した。東部では、経済的な問題と、多くの企業における労働コストの高さから大量解雇が行われ、失業率が急上昇した。失業率は1992年に最悪期を迎えた後、1997年までに20%、2008年までに13%へと下がってはいるものの、今でも西部地域の6.4%とは大きな落差がある。さらに、多くの人材、特に優秀な若い人材が西側に流出してしまっている。

しかし状況は改善傾向にある。2001年から2008年の間、主要企業300社が行った投資の増加分は、旧東独地域に集中している。旧西独地域の投資の伸びは平均約58%に留まったのに対し、チューリンゲン州は180%の伸びとなった。また多くの新しい企業が東部に進出した。国もインフラ整備への補助金、連帯付加税の導入等の対策を実施している。その結果、ドイツの債務は増えたが、それでもユーロ圏で許容される範囲内だ。EUも東部地域への補助金を出し、構造促進事業で再建を後押しした。

今では、西部よりもインフラ整備が進んでいる東部の地域も多くある。東部では、700億ユーロを投じて全長1800キロもの近代的な道路が建設され、高速鉄道網が整備され、多くの空港で改修・拡張工事が実施された。「Plattenbauten」と称された東独の画一的な集合住宅の多くが取り壊され、75万戸分の住宅改修工事が行われ、100万戸分の住宅が新築された。ここでも国庫から450億ユーロを超える助成金が投じられた。

東独地域の医療も大幅に改善した。同地域の人口10万人あたりの医師の数は、1989年には245人だったが、今日では342人。壁崩壊の年、東独国民の平均寿命は西独国民より6年も短く、心臓発作や脳卒中が死因に占める割合は、今より5割も高かった。東独は、高額な先端医療を採り入れる余裕はほとんどなかったが、こうした状況は変わり、今日の医療は西側と同水準である。

壁の崩壊後、多くの市民や政治家は統一に関してさまざまな期待や希望を表明した。当時のヘルムート・コール首相は、東部地域に対し「花咲き誇る風景」との言葉で繁栄を約束し、「生活が今より苦しくなる人はいない」と公約した。あのような変革期に必要な夢を提示したというわけだ。

ヴィリー・ブランド元首相兼SPD党首も「今こそ一体であるべきものが実際に一体となる」と期待感を示した。20年が過ぎた今、振り返ってみると、私たちは多くのことを成し遂げたが、まだゴールには達していない。東西には、失業率が東は西の約二倍となっている等、今も大きな社会的・経済的格差が残っている。

女性への支援や保育に関しては、東独時代のほうがよかったと感じる人が多い。保育施設は東独のほうがはるかによく整備され、収容数も十分にあったからである。そもそもドイツはこの分野において、国際比較でもまだまだ見劣りがする。従って現状に失望し、過去を懐かしむ人もいるわけである。しかし「昔はよかった」式のこうした考え方は、昔を美化する傾向があり、東独が抱えていた問題を記憶から排除してしまいがちである。

また東独には「オスタルギー」と呼ばれる現象もあるが、どちらかというセンチメンタルな懐かしさと理解すべきものであり、本当に東独時代に戻りたいという願望ではない。オスタルギーの代表的な例としては、東部地域外でもよく知られるようになった「Ampelmännchen」(交通信号機に表示されるマーク)と「Sandmännchen」(子供向けテレビ番組の主人公)が挙げられよう。

社会、経済、文化面の違いに加え、多くの年配のドイツ人の場合、今なお「頭の中の壁」というものがある。東西を隔てるこうした発想は、まだ完全には克服できていない。それでも私は、東西両地域が緩やかながら着実に歩み寄りを続けることで、この問題も解決できると確信している。

壁の崩壊は、いうなれば今なお進行中の大がかりな共同プロジェクトの始まりであった。このプロジェクトは、まださまざまな問題を抱えてはいるものの、東部ドイツ経済の発展にも見てとれるように、大きな成果も挙げてきている。今では多くの日本企業がいわゆる「シリコンサクソニー」等の東独地域に進出している。また多くの東部の市町村は、長年の友好関係や共通の関心に基づき、国際的な姉妹都市関係を締結している。磁器の街マイセンと有田の友好関係は、その代表例である。

同時に、ソ連邦の崩壊とそれに続く東欧諸国の民主化は、欧州共同体の東方への拡大をもたらし、現在EUは27カ国の加盟国を擁するに至っている。こうしてドイツは、文字どおり欧州の心臓部に位置する国となった。東独地域は東欧市場進出の理想的な拠点であるし、ドイツは頼りになるパートナーだ。

変革当時は、さまざまな有利な条件が揃っていた。ミハイル・ゴルバチョフは「ペレストロイカ」で改革へのそもそもの端緒を開き、ジョージ・ブッシュ大統領はコール首相の政策を後押しした。そして最終的に「2+4交渉」によって政治統合が可能になったのである。この「2+4交渉」で、第二次世界大戦の戦勝国と共に再統一の手続きが協議され、戦勝国の同意を得て手続きが完結した。それまでにすでに西独がECに統合されており、ドイツが今後とも平和を追求する国であるという他国の信頼があったからこそ、再統一への同意が得られたのである。

またこれにより欧州の東方拡大に向けての最初の一步が踏み出され、すでに2004年にはポーランド、ハンガリー、チェコ等10カ国の新規加盟が実現した。

欧州連合は27カ国、人口5億人を擁する域内市場を形成している。特に経済法分野では、欧州統合により各国法制の統一化が進められており、域外の貿易相手にとっては法務面のやりやすさ、法制のわかりやすさにつながっている。さらに欧州人権条約と、リスボン条約によってEU法となった基本権憲章により、欧州では極めて高水準の基本的人権の保護が保証されている。またEU市民は、基本的自由(労働者の移動の自由、商品流通の自由、開業の自由、サービスの自由、資本の自由)をはじめさまざまな経済的自由を享受している。これらは、共通市場の発展の根幹に係わるものであり、個人に大きな行動の自由を与えている。またユーロ圏の共通通貨は便利だけでなく、欧州経済共同体の安定性を担保している。共通域内市場、共通通貨、域内の連携がなければ、経済金融危機が欧州に及ぼした影響は、実際よりもはるかに甚大なものであっただろう。環境、安全保障、外交の分野では、緊密な協力によって方針の共有や基準の共通化が進んでいる。リスボン条約に基づき、共通外交・安全保障政策上級代表ポストが新設された。ゆくゆくは共通の欧州外交局が創設されることとなっている。

二度の悲惨な世界大戦、想像を絶する破壊、抑圧、そして何百万人もの犠牲者をもたらした歴史を経た欧州で、平和、自由、繁栄がこれほど広く定着していることは、ほとんど奇跡に近い。再統一に関して今なお残っている問題は、これに比べると小さなものでもあり、乗り越えていけるだろう。欧州共同体の創設メンバーであったドイツは、これからも、欧州の心臓部で平和と繁栄を保障していくことを最優先の目標に掲げていく。欧州統合を見れば、人のアイデンティティとは広げていけるものだということが分かる。私自身、ドイツ人であり、欧州人であるが、ひょっとしたら少しだけ日本人でもあるかもしれないと感じている。

ご静聴ありがとうございました。

(独文原稿は希望会員には申し出があれば差し上げます。)



プリンツ公使と堂本前知事



公使とモルゲンシユテルン君を囲んで

—今後の主な催し物案内—

1. ドイツ旅行勉強会

前号でご案内した時間割が一部変更になりましたので、改めてお知らせ致します。
旅行に参加されない方や非会員の方もどうぞご参加下さい。お待ちしております。

- ・ 場所 : 船橋市中央公民館
(船橋市本町2-2-15)
電話 047-434-5551、JR/京成船橋駅より徒歩5分)
- ・ 時間 : 毎回 15:00~18:00
- ・ 日程 : ① 4月8日(木)
前半=「ドイツワインとビール」
近藤弘先生(会員)
後半=「ハンザ都市の文化遺産」
岡村三郎先生(会員)
- ② 4月15日(木)
前半=「グリムとその作品」
宗宮好和会長代行(会員)
後半=「トーマスマン、その落穂
落穂ひろい」
澤井 秀之先生(会員)
- ③ 4月22日(木)
前半=「ハンザ都市リュネブル
ガーハイデの旅の見所」
橋口昭八副会長(会員)
後半=「旅行説明会」
近畿日本ツーリスト
森課長
- ④ 5月6日(木)
前半=「ドイツと音楽」、
土屋有里先生(聖徳大学
及び明星大学講師)
後半=「私とドイツ」座談会
(千葉大ドイツ人留学生参加)

・ 会費 : 全4回で2,000円
・ 申込み : 同封の葉書にてお願いします。

2. 2010年度千葉県日独協会総会

- ・ 日時 : 2010年5月15日(土) 14:00~17:30
- ・ 場所 : フローラ西船(JR 総武線西船橋駅より徒歩3分) (TEL: 0120-262427)
- ・ 式次第 : 総会 14:00~15:00
講演 15:10~16:00
講師 医学博士丸山孝士先生(会員)
◎ (財)日産厚生会介護老人保健施設 佐倉ホワイエ施設長
◎ 前 千葉県がんセンター 病理研究部部长
演題 「治未癌のすすめーウイルス発癌からみた癌予防」
- ・ 懇親会 : 16:10~17:30
- ・ 会費 : 5,000円
- ・ 申込み : 同封の葉書にてお願いします。

3. 第5回「楽しくドイツ語を話す夕べ」

- ・ 日時 : 5月22日(土) 15:30~19:00
- ・ 会場 : ① 15:30~16:45
船橋市中央公民館 第8集会室
② 17:00~19:00
近くの居酒屋(選定中)へ移動しドイツ人と会話を楽しむ。
- ・ 指導 ; 千葉大学言語教育センター
清野智昭先生(会員)
ドイツ人学生等
- ・ 会費 : 概算3,500円(含、居酒屋での飲食代)
- ・ 定員 ; 20名(申込み順)
- ・ 申込み : 同封の葉書にてお願いします。

(お願い)

年会費の納入を同封の振り替え用紙にてお振り込みいただきますよう、宜しくお願い致します。